



林田 怜菜

Reina HAYASHIDA

厄災のミュージアムにおける「対話」の可能性：
「ことばほこぼこフィールドひとぼう」初期事例報告

災厄のミュージアムにおける「対話」の可能性：「ことば ぽこぽこフィールドひとぼう」初期事例報告

○林田怜菜¹，正井佐知¹，高原耕平¹

¹人と防災未来センター 研究部

1. 「ひとぼう」の多様なニュアンス

阪神・淡路大震災に関する「資料収集・保存」と「展示」は、人と防災未来センターの6ミッションのうちの2つである。それぞれ「被災者の想いと震災の教訓を次世代へ継承する」「阪神淡路大震災の経験と教訓をわかりやすく展示し〔略〕防災の重要性やいのちの尊さ〔略〕を伝える」という目的が掲げられている。

ところで同センターに勤務していると、地域住民や来館者にとっての「ひとぼう」への実際の関わり方や位置づけにはさまざまなニュアンスがあることに気づく。震災後に近隣地域内で生まれ育った若者にとっては、学校の校外学習で何度も訪れる施設である。域内の学校教員にとっては自身の震災学習カリキュラムの一部として必要な施設である。より遠い地域から訪れた人々が「阪神・淡路大震災」を知るために初めに訪れる施設でもある。別の地域住民にとっては、自宅に残っていた震災資料の寄贈先である。あるいは震災体験を持つ別の地域住民にとっては、子どもが研究員として働いているが自分自身は訪れたいとは思わない場所である。あるいはまた、震災当時の映像資料の中に自分と同じ制服を着たひとを見出した高校生が絶句する場所でもあるし、若い世代の親が幼いきょうだいを連れて何かを伝える場所でもある。「ひとぼう」は人々のさまざまな想いや物語を刺激し、生み出し、受け止める場所であると言えるだろう。

「ひとぼう」への人々の実際の関わり方がこうした広がりを持つのは、第1にそれがミュージアムという公共の場所であるからだ。第2に、それが阪神・淡路大震災という災厄についてのミュージアムであり、その災厄に対する人々の関わり方や距離感もまた多様であることによる。本人や家族の震災体験の有無や内容、居住地域の遠近、当事者性の強弱などによって、「阪神・淡路大震災」という記号が持つ意味は多様となる。その多様性はミュージアムへの関わり方にも反映される。

こうした状況は「ひとぼう」だけでなく、他地域の災害伝承施設や、戦災・公害などの資料館等にも見いだされると考えられる。一般的には、これら「災厄のミュージアム」の役割として、資料の収集・保存と、啓発・学習・伝承が期待されている。本発表ではその役割を再考

し、地域住民と社会に向けたもう一つの本質的な機能として、物語の有意義な不安定化＝対話の場という側面を持つべきことを論じる。また、この理念に基づいて人と防災未来センターで実施したワークショップの事例報告を行う。

2. 災厄のミュージアムの役割

第二次世界大戦以後、災厄（＝自然災害・戦争・公害など、多くの人が巻き込まれ、社会的・政治的な対応や意味付けが必要となる出来事）について、その地理的中心にミュージアムがしばしば設置されている。博物館法では、資料収集・保管・展示・教育、また資料に関する調査研究を目的として、要件を満たし登録された施設が「登録博物館」とみなされる。しかし日本国内の「災厄のミュージアム」のうち、学芸員や調査研究機能を持つ施設は多くない。そこで「ある特定の災厄に関する①資料の保存、もしくは②展示を行い、③学習・啓発・伝承が可能な、④公共に開かれた機関」を「災厄のミュージアム」と仮に定義する。

では、災厄のミュージアムはいかなる役割を担うのだろうか。それは当然、ある災厄に関する資料の収集・保存・展示であり、またそれを通じた学習・啓発・継承である。ここで熟考したいことは、そもそも災厄というネガティブな出来事について、官民の団体が大小の施設を建て、そうした営みに取り組むのはどういうことなのか、ということである。なぜわたしたちは災厄の跡地に、そこが「跡地」となるかならないかのうちにミュージアムを作ろうとするのだろうか。公共の施設を通じた啓発や継承を模索してしまうことは、何を意味しているのか。

ここでは2つの要素が考えられる。第1に、「つらい過去 difficult past」の記念・物語化である。災厄は破壊と大量の死をもたらし、戦災や公害では加害・被害の錯綜した関係が生じる。社会は共同体が共有する視点にしたがって、こうした過去についての集合的理解を象徴し表現する（ヴィニツキ・セルーシ 2010）。この「記念 commemoration」の具体的実践の代表的なものに追悼式典や記念碑があるが、ミュージアムもまたこれら「記憶の装置」の一種である。つまり災厄のミュージアムは、

その建設と運営、地域内外の人々との関わりによって、「あの災厄は何だったのか」という公式の物語を提示し、さらに来館者が個別の物語を発見することを支える。

この営為は、災厄からの経過時間に影響されるものの、ミュージアムの展示物が喚起する記憶が生々しさを保つかぎりは現在進行形のものであり、その過程においてほぼつねに地域内外で大小の葛藤を生み出し続ける。すなわち、ミュージアムが提示する災厄の意味づけ方について、対立する立場や議論を生む（例えば、「人と防災未来センター」の名称決定に関する事例（阪本 2017）や、東日本大震災・原子力災害伝承館の語り部ボランティアの証言内容規制に関する事例（菅 2021））。あるいは、ミュージアムは先行して存在する対立や葛藤を反映する。

第2に、〈出来事〉への接近不能経路としての痕跡を確保することである。災厄のミュージアムは遺構・遺物・生々しい写真や映像・証言を保管し展示する。それらは、その災厄の〈出来事〉が確かに存在したことを来館者に証示する。と同時に、想像や共感をもってしても〈出来事〉そのものには決して到達（理解・把握）できないことも示す。津波や火砕流の跡を示す遺物や遺構を前にして、ひとはそこで何かが確かに起きたこと、そこで災厄に巻き込まれたひとに悲惨な出来事が生じたことを否応なく直観する。しかしその内実自体を自身の体験のように把握することはできない。どれだけ想像力を働かせても、その場所にいた犠牲者と同じ体験はできない。つまり災厄のミュージアムが内包する遺物等は、〈出来事〉への経路でありつつ、それを通して〈出来事〉それ自体に接近できない経路でもある。災厄のミュージアムは、災厄が持つこの両義的性格を示す。

3. 災厄のミュージアムにおける「対話」の可能性

以上のように、災厄のミュージアムは〈出来事〉への経路を接近不能なものとして示しつつ、その〈出来事〉の意味づけ方・語り方について葛藤を生み出すための公共の「舞台」とと言える。

その葛藤は、具体的には災厄をめぐる物語の不安定化というかたちで現れる。ミュージアムは、出来事から生じた資料や教訓や情報、また遺物や遺構を展示する。それは無秩序な配列ではなく、つねに展示企画者が意識的・無意識的に目論む筋立てを持っている。それによって、体験者が自身の物語を確認・再編し、非体験者への伝達、未来世代への伝承が目指される。ところでミュージアムは一般的に固定した展示内容や語り方、建物構造、観覧経路を持つため、そこから構成される物語も一定の方向性を持つ。前述の葛藤は、災厄をめぐる物語について、このミュージアムの語り方で果たして良いのかという問いかけとして現れる。「人と防災未来センター」の名称決定を例にとれば、阪神・淡路大震災という災厄を「防災」という筋立てで語ることは適切なのかという地域内での問いかけがそこにあったと解釈できる。

災厄のミュージアムは、災厄についてのある物語を示すことで、その災厄について別の語り方が可能ではないかという葛藤を招く。それは主要な語り方を相対化し、その災厄が内包していた種々の課題を蒸し返し、ひとびとの記憶と感情を賦活する。いわば物語を不安定化させる。これは災厄が持つ必然的な性質である。わたしたちがある事件を災厄とみなすとき、その事件について何らかの語り方を選ばねばならないという要請に迫られていると同時に、単一のシンプルな語り方は無いことを認めている。災厄の物語は常に不安定にならざるをえない。ミュージアムは、地域内で公共性をもって物語を不安定化させ続けるという役割を担っている。

とすれば、災厄のミュージアムには、そのミュージアム自身の特定の語り方を示しつつも、別の語り方の可能性を地域及び来館者と共に拡大するという機能が求められるのではないか。というのも、その機能において災厄のミュージアムは自身の「公共性」を十全に発揮すると考えられるからである。

ここで、物語の有意義な不安定化をもたらす営為を「対話 dialogue」と呼ぶことにする。従来、国内の災厄のミュージアムの多くは（特に公的施設は）、その災厄についての正確で体系化された、オーソライズされた知識を提供することを主眼としてきた。これは教育哲学者 P. フレイレの言う「銀行型」教育に近いものと言える（フレイレ 2000）。これに対して対話的な在り方とは、災厄を確定した過去の出来事と捉えず、常に多様な捉え方や再検討が可能であるとみなし、その言語化と問いの生成を絶えず試みる姿勢と規定できる。それは出来事や常識についての固定した考え方からいったん距離を取り、全参画者の公共の発言を尊重し、各自の体験とその言語化過程を共同で吟味する哲学的・実戦的営為として現実化しうる。災厄のミュージアムの理想的な在り方とは、「銀行型」と対話的な在り方の両面が備わった場所であろう。

では、具体的に災厄のミュージアムが「対話」の側面を持つにはどうすれば良いか。この課題に対して、センター研究部ではワークショップ「ことばぼこぼこフィールドひとぼう」を企画・実施した。発表ではその事例報告を行う。

参考文献

- ヴィニツキ・セルーシ（2010）, 記念の本質, 関沢まゆみ編, 戦争記憶論, 昭和堂, pp.41-56.
- 阪本真由美（2017）, 災害ミュージアムという記憶文化装置, 山名淳・矢野智司編著, 災害と厄災の記憶を伝える, 勁草書房, pp.95-119.
- 菅豊（2021）, 災禍のパブリック・ヒストリーの災禍, 標葉隆馬編, 災禍をめぐる「記憶」と「語り」, ナカニシヤ出版, pp.113-152.
- パウロ・フレイレ（三砂ちづる訳）（2018）, 被抑圧者の教育学 50 周年記念版, 亜紀書房